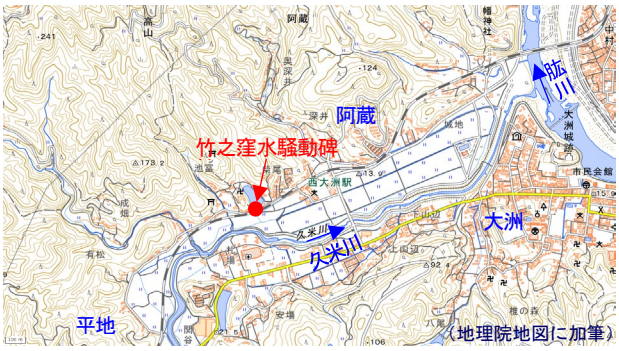
水をめぐる地域対立

大規模な用水事業やダム建設が行われていない時代には、水をめぐって地域間の争いが頻繁に起こっていました。今回は愛媛県大洲市の竹之窪井堰の水論と徳島県三好市の河内谷の水争いをご紹介します。

■竹之窪井堰の水論（愛媛県大洲市）

文化 6 年（1809）6 月 26 日、干ばつのため、宇和島領平地村の竹之窪井堰で、新谷領阿蔵村と大洲領大洲村との間に水論が起こりました。阿蔵村は慣例にしたがい上流の竹之窪井堰の水脈をあけましたが、大洲村が平地村に働きかけて水脈をせき止めたため水が絶えました。阿蔵方は怒ってこれをあけました。両者は口論となり、阿蔵方 80 余人と大洲方 30 余人が久米川を挟んでにらみ合うことになりました。この水論は阿蔵方に非ありと処分されましたが、これに対して阿蔵方は事件の再審を願い出たため、大洲・新谷・宇和島の三藩で事件収拾のための折衝が行われました。結局、文化 7 年 10 月に紛争は解決し、阿蔵村の農民は権利を守ることができました。大洲・新谷両藩は、紛争の禍根を断つため替地を幕府に願い出て、文化 9 年に認可されました。＜大洲市誌編纂会編「大洲市誌」1972 年、門田恭一郎「伊予における水論について（下）」伊豫史談第 318 号 2000 年など＞



■河内谷の水争い（徳島県三好市）

三野町（現三好市）の河内谷では、東岸の三村（芝生、勢力、加茂野宮）と西岸の東川原の間で、農民が対峙し、鍬、鎌などを構えた水争いが度々起こりました。東岸の三村用水は、文化 3 年（1806）の干ばつを機に河内谷の岩角に釜所をつくり、そこから三村に導水する水路が文化 5 年に完成しましたが、その成功を見て同年に西岸の東川原に導水する太刀野用水が着工されました。しかし、太刀野用水は三村用水の釜所よりも下流に釜所をつくらざるを得なかったため、ほとんどの水は三村用水に流れ込み、太刀野用水の水量が少ないため水争いが起こったのでした。この水利権争いは、昭和 2 年 1 月に調停裁判の結果、三村に 8 割、太刀野に 2 割分水する和解が成立しました。＜三野町誌編集委員会編「三野町誌」1974 年、吉岡浅一編「三好郡歴史散歩」1980 年＞